375.9
Y019
資料室

吉田彌平編

師範國文

第一部用

九卷

東京
光風館藏版

42662
教科書文庫
4
810
51-1931
200030
1934
S6.
1931

資料室

教科書文庫
4
810
51-1931
2000301934

375.9
Y019

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

師範國文

第一部用

卷九

吉田彌平編

東京　光風館藏版

広島大学図書
2000301934

ーチツロタスンの院兒孤ツンタス

慶應義塾大学
43502
書庫

師範國文 第一部用 卷九

目次

一　國文學の精神……久松潛一　一
二　草枕……夏目漱石　一三
三　幻住庵の記……松尾芭蕉　二六
四　猿蓑鈔……幸田露伴　三一
五　比良の山風……〔新古今和歌集〕　四一
六　かぐや姫……〔竹取物語〕　四六
七　土佐日記鈔……紀貫之　六三

頁

六　出立ち……六二
七　海の上……六四
八　都入り……六八
九　うたひもの……七一
一〇　神樂……七一
一一　催馬樂……七二
一二　今樣……七三
一三　朗詠……七五
一四　科學者と藝術家……寺田寅彦　七五
一五　枕草子鈔……清少納言　八七
一六　春は曙……八七
一七　此の君……八八
一八　にくきもの……九〇
一九　源氏物語……本居宣長　九五
二〇　愚禿親鸞……西田幾多郎　九八
二一　大人と子供……相馬御風　一〇三
二二　子供の文學……松村武雄　一〇九
二三　全人としてのペスタロッチー……小西重直　一一九

目次終

久松潛一
國文學者
東京帝國大學助教授
明治二十七年愛知縣生

師範國文 第一部用 卷九

一 國文學の精神

久松潛一

國文學の精神は何であるか。或は月花をめでるといふ優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。しかし、よく考へて見れば、もつと生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私はこゝに國文學を流れる精神として、まことと、ものゝあはれと、幽玄といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。第一にまことの精神とは、あるがまゝのもの、卽ち事實をあるがまゝに表現する精神を中心としてゐる。これが上古の國文學

を貫く精神であると見られると思ふ。これを內容的思潮的方面から見ると、そこに强い國家的精神と個人的精神とが現れてゐる。國家的精神は古事記を中心として見られる精神で、この國家は神によつて作られ、宇宙も人類も亦神によつて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神である。同じ神の中に自然神もあり、人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり、祖先神もあり、色々であるが、何れにしても、自己より偉大なる神によつて生きる精神は、古代人の眞實なる心持のまゝ古事記に表現されてゐるのである。

もとよりそこには想像もあり、超現實的なことも多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものでなく、彼等に眞實なものとして映じたものがそのまゝに傳はつてゐるのである。

人麿
柿本氏
持統文武兩帝の御代の歌聖
皇子
天武天皇の御子
草壁皇子高市皇子など

さてまた萬葉集の中心となる精神は個人的の精神であると思ふ。人麿は國家の建設を說き、神をうたつてゐるが、その中心は皇子の薨去を悼む哀痛の感情にある。かくて一方には自然に只管なる愛を向けるやうになり、自然の中に身を投入れて、そこに自己と自然と一つになつた境地が見られる。また一方には人生に向つて情熱的な愛をうたひ、或はこの人生の享樂すべきをうたひ、或ははかなき世であつても、現實にある間は現實をよりよく生きていかうとする强い現實に發する愛をうたつてゐるのである。

この素樸な、まことの感情を中心とする上代人の物の見方を見つめていくと、第一に一元的綜合的である。神と人、自然と人を一つのものとしてながめる。第二に率直にして積極的である。

見方が單純で、迂餘曲折がない。第三に物を觀察するに多く具象的である。歌を詠むにも、眼に觸れた事象を先づうたふ。對象をあるがまゝに直觀し、これを直接的に表現するのである。而してこの精神は文化が爛熟したとき、復古的精神として常に現れて來るのである。復古的精神とは單に文字通り古に復るのではない、古代人の眞實性と素樸性とに復ることがその精神である。例へば平安末期に於て現實生活に頽廢と行きづまりとを生じたとき、實朝は萬葉集の精神に復つてその素樸性と眞實性とを求めたのであると思ふ。かくて實朝の心境を見ると、一方には國家的精神が現れてゐる。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめ
やも

實朝
源氏
鎌倉三代の將軍
承久元年（一八七九）
薨
年二十八

一方には人間的な愛の精神が現れてゐる。

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母をたづぬる

又自然をうたふにしても、實朝の歌は萬葉時代のやうにありのまゝを見つめる、そしてありのまゝに表現するといふ態度が現れてゐる。

第二に、ものゝあはれの精神は、ものゝ中に見出したあはれの精神である。あるがまゝのものゝ上に見出したあるべき世界である。それは心と形との調和の中に見出される情熱の世界であるともいへる。本居宣長は、ものゝあはれを源氏物語の基調であるとし、又平安時代文學の基調としてゐる。それは上古文

本居宣長
國學四大人の一
享和元年（一八〇一）
薨
年七十二

學の中に見える素樸な感情ではなく、それをあくまで洗煉した境地である。あるがまゝのものからあるべきものを見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あなおもしろ、あなたのし。」とある「あはれ」である。隨つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。これを歌の上に見るに、平安時代の歌は萬葉時代のやうに感情を直接的に表現するより、それを反省する所から理智的傾向になる點がある。從つて、强烈なる感情を沈靜にし、情趣化する事にもなる。古今集の歌がそれである。そこに素樸的から技巧的な點も生ずると思ふ。平家物語は敍事詩的の物語であるが、勇壯な戰鬪の間を色どつて流れてゐるものは、もの、

俊成
歌人
藤原氏
千載集の撰者
元久元年（一八四）
薨
年九十一

あはれの精神である。そしてそこに華やかな、勇壯な悲壯美を形づくつてゐると思ふ。

第三に、幽玄の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に「或事關二神異一、或興入二幽玄一。」とあつて、本來はものゝあはれとほゞ相近い意味であるが、平安末期の世相の轉變から人生の無常を觀じ來り、宗教的の考が深く入込んで、物寂しい境地を主とするやうになつた。俊成が得意な歌として、

夕されば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草の

さと

を擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪する事によつてその靜寂の境

西行
歌僧
俗名佐藤義清
建久元年(一五〇)
寂
年七十二

地を見出して來たのも、それである。美しく咲く櫻の花陰にひそむ靜けさ、寂しさを見出でたのが西行であつたと思ふ。而してその幽玄は俊成のよくいふ遠白い卽ち壯大といふ感情と、心が細い卽ち纖細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。

而してこの精神は、一歩進めて考へると、近古文學を流れる傳統的精神や、個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一致するものがあると思ふ。卽ち文學を個性的にそのまゝ表現せず、之を傳統の型の中に入れて、そこからいぶしにかけた上で表現するのである。大きな自由な精神を型といふ窮屈な狹いものゝ中に入れて、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。これは徒然

非家
專門家ならぬ人

草に見える道といふ事によつてもわかる。愚にして愼めるは巧にしてほしいまゝなるにまさるといふのは、畢竟、道は一の型の中に入れて精練して始めてすぐれたものとなると考へたのである。そこに專門家を敬する心持が出で、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずる。この型の中に入れる事によつて、その小さい我の否定された中から現れて來る大きな自然、ここに幽玄が現れて來ると思ふ。茶にしても、庭にしても、型の中に入つて、而も型に捉はれない自由な境地を見出して來るのではあるまいか。それは最も小さいものゝ中にある最も大いなる生活である。而してこれは室町時代の藝術を代表する能樂に於てもさうである。一の型の中に入れて、その中に普遍的な人間性をあらはさうとしてゐる。非家では到底味はふことの

世阿彌　室町時代の能樂謠曲を大成した人　觀世元淸　康正元年（一四五五）歿　年八十一

芭蕉　江戸時代の俳聖　松尾氏　元祿七年（一六九四）歿　年五十一

出來ない境地である。世阿彌のいふ幽玄の精神もやはりそこにあると思ふ。この幽玄は、近世文學に於ては、更に芭蕉の閑寂の精神ともなつてゐる。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質をさびであると見たのみならず、このさびに徹して、さびを生活の上に見出して來てゐる。「高く心をさとりて俗にかへるべし」といふのは、生活をさび化し、幽玄化する事であると解せられる。かくの如くにして、自然と人生との窮極であるさびや幽玄は、又藝術の窮極でもあつたのである。

あるがまゝのものに理念を見出した境地がまことであり、あるがまゝのものゝ中からあらうとするものを見出して表現したのがものゝあはれであり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それをいぶしにかけて、統一せしめ、結晶せしめた大白光の如き境地が幽玄であらう。童のやうな素樸さから華やかな境地となり、そしてさびに達するのである。

かくの如く見るとき、まことと、ものゝあはれと、幽玄とは一見異なつた理念のやうで、而も本質的な相違ではなく、展開のそれぞれの過程である。まことが童心と素樸との藝術を生み出し、ものゝあはれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に幽玄がすべての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として表はさうとする、或點からいへば象徵的な藝術を生み出したかと思ふ。而して是等の展開流動する精神を統一したもの、そこに國文學の本質が見出されるであらう。

（上代日本文學の研究）

夏目漱石
英文學者
小說家
名は金之助
大正五年歿
年五十

二　草枕

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生まれて、畫が出來る。

人の世を作つたものは神でもなければ、鬼でもない。やはり向ふ三軒兩隣に、ちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて越す國はあるまい。あれば、人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處を、どれほどか寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。

こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。

夏目漱石

あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐にするゆゑに尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、有難い世界をまのあたり寫すのが詩である、畫である。或は音樂と彫刻とである。こまかに言へば、寫さないでもよい、只まのあたり見れば、そこに、詩も生き歌も涌く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起る。丹青

カメラ Camera

は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、よく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱する點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得る點に於て、我利我慾の羈絆を掃蕩する點に於て、――千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のある所にはきつと影がさすと悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。――喜の深きとき、

憂愈深く、樂しみの大きいほど、苦しみも大きい。これを切放さうとすると、身が持てぬ。片附けようとすれば、世が立たぬ　金は大事だ。大事なものが殖えれば、寐る間も心配だらう。閣僚の肩は、數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。旨い物も食はねば惜しい。少し食へば飽きたらぬ。存分食へば、後が不愉快だ。……

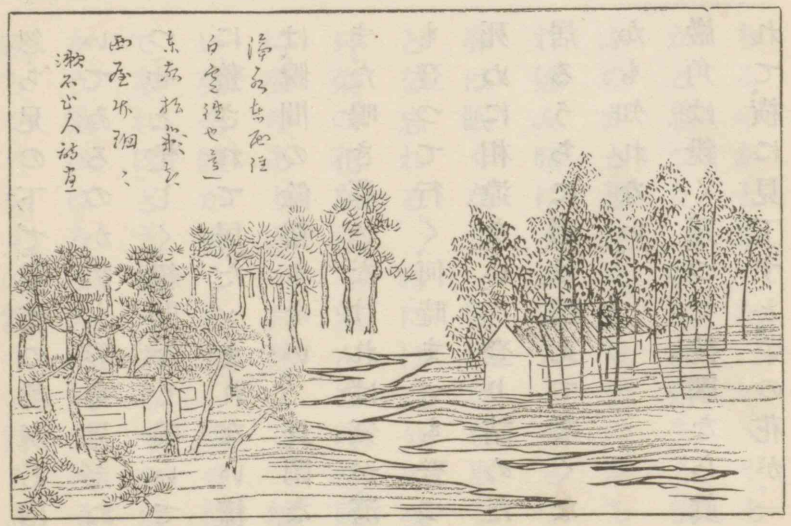
余の考がこゝまで漂流して來たときに、余の右足は突然坐りのわるい角石の端を踏みそこなつた。平衡を保つために、すはやと前に出した左足が、仕損じの埋めあはせをすると共に、余の腰は、ぐあひよく方三尺ほどな岩の上におりた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍りだしただけで、さいはひに何の事もなかつた。

バケツ
Bucket

立上る時に、向ふを見ると、路から左の方に、バケツを伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か分らないが、根元から頂まで、悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤く、だんだらにたなびいて、つゞき目が確と見えぬ位、霞が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は、巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ、はつきりしてゐる。行く手は二町程で切れてゐるが、黒い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、さほど手間も入るまいが、土のなかには大きな石がある。土は平にしても石は平にならぬ。石は切碎いても岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等

筆蹟
隔レ水東西住、
白雲往也還。
東家松籟起、
西屋竹珊々。
漱石山人詩畫。



（夏目漱石筆）

の爲に道を讓る氣色はない。向ふで聞かぬ上は、乘越すか、廻らなければならぬ。巖のない處でさへ、歩きよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くといはんより、川底を渉るといふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶら〳〵と七曲へ懸る。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いてゐるのか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に螫されて居たゝまれない樣な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を、鳴き盡くし、鳴き明かし、また鳴き暮さなければ氣が濟まぬと見える。其の上、何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂うて居るうちに、形は消えてなくなつて、只、聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて按摩なら眞逆樣に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落

シェレー
英國の詩人
P. B. Shelley (1792—1822)
雲雀の詩
"To a skylark,,
一八二〇年作

ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛揚つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と揚る雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に、落ちる時も揚る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。只、菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いた時に、魂のありかゞ判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものゝうちで、あれほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つてかう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えた所だけ

諳誦して見たが、覺えて居る所は二三句しかなかつた。其の二三句のなかに、こんなのがある。

前を見ては、後を見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。

腹からの笑といへど、苦しみのそこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想、籠るとぞ知る。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の樣に思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に、神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。それならば、詩人になるのも考へものだ。

しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見續けである。足の下に、時々蒲公英を踏みつける。鋸の樣な葉が遠慮なく四方へ伸して、眞中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒な事をしたと振りむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸の中に鎭座して居る。暢氣なものだ。又考を續ける。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦しみもない。菜の花を見ても、只、嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り、櫻も――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て、自然の景物に接すれば、見るもの、聞くもの面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

併し、苦しみのないのは、何故だらう。只此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。此の景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補にもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力は、こゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽き〳〵した。飽き〳〵した上に、芝居や小說で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗

念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絕した小說は少からう。何處までも世間を出る事が出來ぬのが、彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、此の境を解脫することを知らぬ。何處までも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも、無理ではない。

嬉しい事に、東洋の詩歌は、そこを解脫したのがある。「採菊東籬下、悠然見南山。」只それぎりの裏に、暑苦しい世の中を、まるで忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣の人が覗いてる譯でも

採菊東籬下
晉の陶淵明の句

獨坐幽篁裏　唐詩選にある王維の詩
不如歸　德富蘆花の作
金色夜叉　尾崎紅葉の作
桃源　秦の亂を避けた人の隱れた村といふ　支那湖南省湘潭の近く
王維　盛唐の詩人（一三五九—一四一九）
淵明　陶潛の字　晉の詩人隱逸（一〇三五—一〇八七）

なければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と、出世間的に、利害得失の汗を流し去つた心持になれる。「獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。深林人不知、明月來相照。」只二十字のうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は、「不如歸」や「金色夜叉」の功德ではない。汽車・汽船・權利・義務・道德・禮儀で疲れ果てた後凡てを忘却して、ぐつすり寐込む樣な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれて居るから、わざ〳〵暢氣な扁舟を浮べて此の桃源に溯るものはない樣だ。余は、固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を、今の世に布敎して廣げようと云ふ心掛も何にもない。只自分にはかう云ふ感興が、演藝會よりも、舞踏會よりも、樂しみになるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも有難く考へられる。かうやつて只一人、繪具箱と三脚几を擔いで、春の山路をのそ〳〵歩くのも全くこれが爲である。淵明・王維の詩境を、直接に自然から吸收して、すこしの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願、一つの醉興だ。

ファウスト　Faust　ゲーテの傑作
ハムレット　Hamlet　シェクスピヤの名作

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情は、さう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寢た男でもなからう。やはり餘つた菊は花屋へ賣つて、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かういふ余も其の通り、いく

那古井
假設の地名であらう
松尾芭蕉
俳聖
伊賀國上野生
元祿七年（一三五四）歿
年五十一
石山
滋賀縣近江國滋賀郡石山村石山
岩間
石山村南鄕
國分山
石山村國分にある山
國分寺
聖武天皇天平十三年（一四〇一）ごろ諸國に創建
翠微
謂ヒテ未レ及ニ頂上一在レ旁陂陀之處。
山氣青縹色、故名ニ翠微一。

ら雲雀と菜の花が氣に入つたつて、山の中へ野宿する程、非人情が募つては居らぬ。こんな處でも人間に逢ふ。ぢん〳〵端折りの頬冠や、赤い腰卷の姉さんや、時には、人間より顏の長い馬にまで逢ふ。百萬本の檜に取圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭は、なか〳〵取れない。それどころか、山を越えて、落ちつく先の今宵の宿は那古井の溫泉場だ。（漱石全集——草枕）

三　幻住庵の記

松尾芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像と

（爾雅疏）
光を和げ
和ニ其光一同ニ其塵一。（老子）
曲翠
芭蕉の門人
近江膳所生
五十年やゝ近き身
元祿三年（一三五〇）芭蕉四十七歳
象潟
秋田縣羽後國鳥海山の西北麓の名所
鴉の浮巢
かいつぶりが蘆の枯葉などで作つた水上の巢
やがて出でじ
吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん
（西行）

かや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物しづかなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根漏り、壁落ちて、狐・狸ふしどを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になん侍りしを今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予亦市中を去ること十年ばかりにして、五十年やゝ近き身は蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今年湖水の波に漂ふ鴉の浮巢の流れ留るべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月の初め、いとかりそめに入りし山の、「やがて出でじ」とさへ思ひそみぬ。

吳楚東南に走り
昔聞洞庭水、今
上岳陽樓。吳楚
東南析、乾坤日
夜浮。……
（唐の杜甫）

瀟湘洞庭
惠宗煙雨歸雁、
坐ニ我瀟湘洞庭ニ。
欲下喚ニ扁舟一歸
去上、故人道是丹
青。
（宋の黄山谷）

笠取
京都府宇治郡笠
取村笠取
石山の西南十二
粁

三上山
近江富士
石山の東北二十
四粁

士峯

さすがに春の名残も遠からず、躑躅咲きのこり、山藤松にかゝりて、時鳥しば〳〵過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥のつゝくとも厭はじなど、そゞろに興じて、魂は吳楚東南に走り、身は瀟湘洞庭に立つ。山未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し。比叡の山・比良の高嶺より辛崎の松は霞こめて城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞のたゝく音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は士峯の俤に通ひて、武藏野の舊き住家も思ひ出でられ、田上山に古人をかぞふ。

なほ眺望隈なからんと、後の峰に這上り、松の棚つくり、藁の圓座を敷いて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、主簿峰

富士山
古人
猿丸太夫
墓は田上山の麓
にあるといふ

海棠に
徐老海棠集上、
王翁主簿峰庵。
（宋の黄山谷）

とく〳〵の雫
とく〳〵と落つ
る岩間の苔清水
汲みほすほども
なきすまひかな
（西行）

高良山
福岡縣筑後國三
井郡高良山神宮
寺

甲斐何がし
藤木甲斐守敦直
寛永時代の書家
慶安二年（二三〇九）
歿
年六十八

幻住庵の額

に庵を結べる王翁・徐侄が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となりて、孱顏に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。偶〻心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく〳〵の雫を侘びて一爐の備いと輕し。

はた昔住みけん人の殊に心高く住みなして、巧みおける物ずきもなし。持佛一間を隔てゝ夜の物を納むべき處など聊かしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は賀茂の甲斐何某が愛子にて、此の度洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いと易々と筆を染めて幻住庵の三字を送ら

る。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寢といひ、さる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝は稀々とぶらふ人々に、心を動かし、或は宮守の翁、里の男ども入來りて、猪の稲食荒し、兎の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に、日已に山の端に懸れば、夜坐靜かに月を待ちては影を伴なひ、燭を秉つては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身、人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つらつら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、この一筋につながる。樂天は五臟

罔兩　罔兩問ヒテ景ニ曰、曩ニ子行、今子止。曩ニ子坐、今子起。何其無ニ特操一與。（莊子）

樂天　唐の詩人白居易の號　會昌六年（一八〇六）歿　年七十五

老杜　唐の詩人杜甫　太曆五年（一七七〇）歿　年五十九

猿蓑　芭蕉七部集の一　元祿四年（一六九一）成

幸田露伴　國文學者　小說家

の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨てゝふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり夏木立　（芭蕉全集——猿蓑集）

四　猿蓑鈔

幸田露伴

猿蓑は元祿四年仲夏凡兆・去來の需によりて尾に題せるよしの丈草の跋文によりて、同三年あたりより撰の企ありしか否やは知らず、四年辛未を以て凡兆・去來の手に成りしこと明らかなり。凡兆・去來は京に在り、芭蕉は三年四月江州石山の奥なる幻住庵に入りて居を定め、四年四月は京の嵯峨なる去來が落柿舍に遊びなどせるなれば、此の間に芭蕉の心裁手定を得て猿蓑の出づるに至りたること推知すべし。集の體は先づ多く發句を載せ

名は成行　文學博士　慶應三年（一八六七）江戸生

凡兆　加賀の人　京都に住む　歿年未詳

去來　向井氏　肥前の人　京都に住む　寶永元年（一七〇四）歿　年五十四

丈草　內藤氏　尾張の人　近江粟津に隱栖す　元祿七年（一六九四）寂　年四十五

落柿舍　京都の西郊嵯峨野にある去來の別宅

たること曠野の如くなれど、末卷に至りて幻住庵の記、及び庵に關する詩・俳句を載せたること、いたく他の集と樣かはりたり。集の調は華實倶備、奇正雙收、俳諧者流の所謂不易と流行とを兼ねて、既に全く古調・談林調を蟬脫し、弄語・謔辭の窠臼を出で、通俗の言を以てすと雖も、詩歌の眞精神に於て立つあらんとするの蕉風を渾成せるにちかし。卷一より卷四に至るまで、收むるところの發句、佳なるもの多し、他の集の及ぶ能はざるところなり。連句に至りては、冬の日は力を用ひること多きに過ぎて、煥爛なれども固し、炭俵は興を取ること輕きに傾きて淸新なれども淺し。此の集のは中正韵雅、しつとりとして好し。篇什多からざるを憾むと雖も、第三第四の品に墮つる者も亦これ無し。世の猿蓑を好むもの多きも宜なりと云ふべし。

曠野
芭蕉七部集の一
元祿二年(二三四九)
成

談林調
西山宗因の開いた俳諧の一派

冬の日
芭蕉七部集の一
貞享元年(二三四四)
成

炭俵
芭蕉七部集の一
元祿七年(二三五四)
成

去來

鳶の羽も刷ひぬはつしぐれ

風蕭々として寒林骨あらはなるに初時雨のさつと降りそゝぎて梢にとまり居れる鳶の孑然として獨り在るさまを云へる一幅の疎林寒雨の好畫圖なり。たゞこれ韵致を以て勝る、理致を以て高き句にはあらず、しかるに舊解に、「彼方の枝にとまりたる鳶の羽を刷ふを見て、人として容を修めざるは鳥にしかずと觀ずるさまなり。」など云へるは、曲齋の蛇足なり。「鳶も羽をと作るべきをかく云へり。」といへるは凉岱の愚說なり。「羽もといへるも文字、諸鳥へかけて云へるなり。」といふも、「雨やどりせる人へかけて云へるなり。」といふも、皆要無き贅言なり。鳶の平生の姿、鳥の雨風にあへる姿などを知らば、この句のも文字を下せる所以、かいつくろふといへる語を用ひたる所以もおのづからに曉

曲齋
七部婆心錄を著す

凉岱
建部綾足
小說家
俳人
歌人
安永三年(二四三四)
歿
年五十六

るべくして、去來の詩眼精警、詩腕靈活なるを悟るべし。鳶は鴟・梟と並稱して、梟なんどの如く、羽毛ふくよかに、姿むくつけく、烏・鳩なんどの如くに引締りたるさまならぬものなり。又一切の鳥類は雨にも風にも其の頭の方をさしむけて、必ず身の羽毛の逆立たぬやうにするものなり。もといひ、刷ふといへる、極めて面白く、時雨の颯然として始めて至る、寒樹孤鳶、情景想ふべし。

時雨なるかな、鳶なるかな。鳶なるかな、時雨なるかな。

一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉

春雨にも秋雨にもあらず、夏の夕立雨にもあらぬ時雨の降りたるさま一句の中にあらはれて、且起り且休める風、忽ち降り忽ち止める雨、落葉のはら〳〵と墜ち、かさこそと走り、旋り舞ひてさてしづまれる狀僅々十四字の上に見ゆ。

史邦
芭蕉の門人
中村氏
尾張の人
京都に住む

股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆

朝から濡るゝといへるに其の人の情を具して、寒雨落葉の景の中に小川をかち渡りする男を點じたり。「橋の落ちたる川邊に行路難を歎ずる」など釋せるは、聊か過ぎたり。凡兆は肚裏に物有る如き句を作らで、さら〳〵として氣味新鮮なるを喜び詠ずる作者なり。

たぬきをおどす篠張の弓　史邦

篠の張弓とすべきを篠張の弓としたるに聊か曲あるところを看取すべし。挑灯の弓、突上窓の弓、皆弓の名を負ひて眞の弓にはあらず、こゝのは弓は弓に近けれども、これも弦を張りたる案山子の持弓ごときにはあらず。舊解皆前句の川越ゆる男、狸おどしの篠弓を携へたりと爲せるをもて、その趣は解し難く、その

伊勢貞丈
國學者
故實家
江戸幕府の士
天明四年（一七八四）
歿
年七十

夫木抄
室町時代の歌集
藤原長清撰

狀は笑ふべきを致せり。大の男の篠弓一張持ちて股引の濡る
る川を渉れるさま、狸をおどすとよりは狐につまゝれたる姿な
るべし。篠弓ならば二尺七八寸なるべく、伊勢貞丈も然云へり。
さる小さき細弓を如何なるところに如何に置きて狸をおどす
べきかや。「篠ためて雀弓張る男の童ひたひ烏帽子のほしげな
るかな」といへる西行の戯歌は夫木抄卷三十二に見えたれど、そ
れは雀射んとする男の童なれば篠弓も似つかはし、股引男の篠
弓持ちて川渉りするが狸をおどさんとするなりとは餘りに戯
畫の如く虚談の如し。甚だしきかな後の俳諧者流の世の實際
にも疎く詩の眞味にも遠ざかれるや。これは篠むらの篠の强
きを地に生ひたるまゝ撓め伏せて弓の如くに張り、樹の枝・極（また）な
んどもて土に縫ひつけ置き、すこしく之に觸るれば機發して俄

然として觸れたるところのものを彈き擊つやうにするものを
云へるなり。狸・狐・兎なんどの類皆これをもて威し畏れしむべ
く、其の大なるものに至つては楢・櫟なんどを弓として野猪をも
おどすべく、今の語にぶつぱたきと云ひて、山村・僻地などにては
稀ならず爲すことなり。一句は正しく此の事にて、殊に篠叢は
川沿なんどに多きものなれば、前句との照映も自然にして宜し
く、濡れ股引に狸おどし、感情景境相應じて如何にもわびしく寂
びたる片里のさま見ゆ。

まいら戸に蔦這ひかゝる宵の月　芭蕉

まいら戸はまひら戸なりや、又まゐら戸なりや、不明なり。多く
玄關に立つる戸なれば、參らう戸なりといふは疑ふべし。框の
間の全部を板もて張り、これに一寸内外の幅ある木を繁く横さ

まに取附けたる戸なり。板を綿板といひ、取附けたる木をまいら子といひ、取附くるには小間がへしにするを常式とし、或は小間返しよりも間を疎らにもす。小間返しとは其の取附くる子と、子の間とを同じにするをいふ。子と框とを黑塗なんどにするを常とす。士人の家・醫・庄屋・寺なんど、玄關正面に用ひらる。

蔦這ひかゝるは、宵の月とあるによりて蔦の影這ひかゝると看る方よし。實に蔦の這ひかゝれるとするも、宜しかれど、さては宵の月いたづらに空に在りて有るかひも無からん。前句とのかゝりは解を須たで明かなり。「篠張の弓の長押などに懸けてありたるを見て其の家のさまを附けたり」といへる空然の註、「蔦の影を指さして、あの如くなれば狸が飯盜みに來て叶はずと噂する」といへる曲齋の釋も要無きことならん。「零落の山寺など

空然
松本氏
江戸の人
猿蓑さがしを著す
天保十一年（一八四〇）歿
年五十六

と見るべし」と曉臺の云へるは、山寺と限りて云はざるも却て宜し。夫木抄卷二十七「人住まで鉦も音せぬ古寺にたぬきのみこそ鼓うちけれ」寂蓮法師の歌も思ひ合はされてをかし。

去來

人にもくれず名物の梨

田舍のまいら戸あるやうなる家又は院の主人など、得て慢氣强く見識ばり、又は不思議に物恪みして刻薄なるなんどが有るものなり。澁紙袋の月に黑々と庭の梨子のなりたるを云へり。

徒然草、神無月の頃栗栖野を過ぎての段、彼方の庭に大きなる柑子の樹の枝もたわゝになりたるがまはりを嚴しく圍ひたりしこそ少しことさめて此の樹無からましかばと覺えしか」と云へるの趣もあるべくや。

かきなぐる墨繪をかしく秋暮れて

史邦

曉臺
加藤氏
俳人
寛政四年（一七九二）歿
年六十一

寂蓮
鎌倉時代の歌僧
俗名藤原定長
建仁二年（一二〇二）寂

栗栖野
京都市の東郊山科村花山あたり

めりやす
Medias (Meias)

磁盆または高坏なんどに名物の見事なる梨ありとして、氣象卑しからぬ人の、世をも人をも清らに樂しく經なんどする趣を云へり。かきなぐるの五文字よく働きて其の人柄見ゆるが如く、畫家と見んよりは隱士・高人と見るべく、名物の梨子も此の人にあひてはさして珍重もされず、自らも貪らず人にもくれず差置かるゝなり。但し名物のおのづからにしてかゝる人の許に現るゝも亦おもしろき世の態なり。前句名物の一語に着眼着力して此の句は成りたるなるべし。墨畫に秋暮るゝ自然のうつり宜し。

はき心よきめりやすの足袋　凡兆

前句の人の穿けるなり。めりやすは今も用ひる語ながら、當時のは今のものとは少しく異なりて粗なりしならん。或はいふ、

メリンス
Merinos

今のメリンスの足袋ならんと。確知せず。鉛筆・石鹸等と共に毛織・毛編も元祿の頃既に用ひられしなれど、めりやすの足袋は猶普通のものにはあらで、物好の人の侈りにやありけんと覺し。一句に庭前屋後の逍遙のさまありて、前句の秋暮れてと照應せり。（ひさご猿蓑抄）

五　比良の山風

五十首奉りし中に、湖上花を。　宮內卿

花さそふ比良の山風ふきにけりこぎゆく船のあと見ゆるまで

和歌所にて、關路鶯といふことを。　太上天皇

鶯のなけどもいまだふる雪に杉の葉しろきあふさかの

後徳大寺左大臣
藤原實定
建久二年（一八五）
薨
年五十一

筆蹟
月かげのきよみがせきにすみぬればおきのつりぶねかずことにみゆ

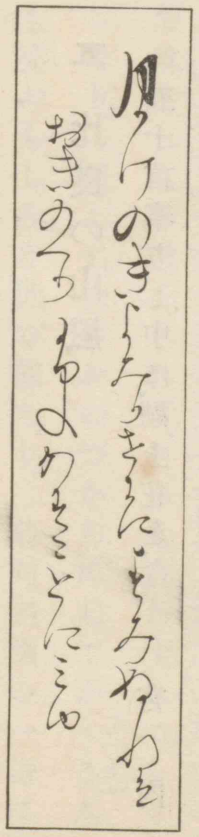
俊成
藤原氏
歌人
千載集の撰者
元久元年（一八六四）
薨
年九十

頼政
源氏
治承四年（一八四〇）
薨
年七十七

せき

晩霞といふことをよめる。　後徳大寺左大臣

なごの海のかすみの間よりながむれば入日をあらふおきつしらなみ



筆成俊

百首歌奉りし時。　皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山吹のはなのつゆそふ井出の玉がは

夏月をよめる。　從三位　頼政

庭のおもはまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月

筆蹟
おく山の紅葉のにしきほかよりもいかにしぐれてふかくそめけむ

攝政太政大臣
藤原良經
建永元年（一八六六）
薨
年三十八

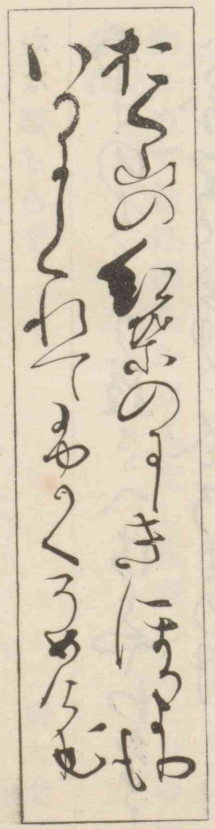
藤原有家
歌人
重家の男
建保四年（一八六）
薨

藤原家隆
歌人
光隆の子
新古今集撰者の一人
嘉禎三年（一八七七）
薨
年八十

かな

西行法師すゝめて、百首歌よませ侍りけるに。　藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋のゆふぐれ



筆家定

攝政太政大臣家百首歌合に。　藤原有家朝臣

風わたる淺茅がすゑの露にだに宿りもはてぬよひの稲づま

湖邊月といふことを。　藤原家隆朝臣

鴉の海や月の光のうつろへばなみの花にも秋は見えけり

五十首の歌奉りし時。　　攝政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな

筆蹟

あまのはらそらさへさえやわたるらむこほりとみゆる冬のよの月

筆　隆家

後冷泉院の御時、うへのをのこども大井河にまかりて紅葉浮水といへる心をよみ侍りけるに。　　藤原資家朝臣

筏師よまてことはむ水上はいかばかりふく山のあら

藤原資家
歌人
資房の男

しぞ

題しらず。　　藤原清輔朝臣

冬がれの森のくちばの霜のうへにおちたる月の影の寒けさ

百首歌奉りし時。　　藤原定家朝臣

駒とめて袖打拂ふかげもなし佐野のわたりの雪のゆふぐれ

題しらず。　　前大僧正慈圓

庭の雪にわが跡つけて出でつるを訪はれにけりと人や見るらむ

定家朝臣の母みまかりて後、秋頃墓所近き堂にとまりてよみ侍りける。　　皇太后宮大夫俊成

藤原清輔
歌人
顯輔の男
續詞花集の撰者
治承元年(一八三七)
卒

慈圓
歌人
天台座主
嘉祿元年(一八八五)
寂
年七十一
慈鎭と謚す

まれに來る夜半もかなしき松風をたえずや苔の下に聞くらむ　宜秋門院丹後

和歌所歌合に湖上月明といふことを。

夜もすがら浦こぐ舟はあともなし月ぞのこれる志賀の唐崎　鴨長明

鴨社の歌合とて人々よみ侍りけるに、月を。

石川やせみの小川のきよければ月も流をたづねてぞすむ　（新古今和歌集）

丹後　女歌人　源頼政の弟頼行の女

長明　歌人　方丈記の作者　建保四年（一八七六）寂　年六十三

六　かぐや姫

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、萬づの事につかひけり。名をば讃岐造麿となむいひける。その竹の中に本光る竹一すぢありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁いふやう、「われ朝毎夕毎に見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて、手に打入れて家に持ちて來ぬ。妻の嫗に預けて養はす。美しきこと限りなし。いとをさなければ籠に入れて養ふ。竹取の翁、この子を見つけて後に竹を取るに、ふしを隔てゝ、よごとに黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて翁やうやう豐かになり行く。この兒養ふ程にすく〳〵と大きになりまさる。三月ばかりの内によき程なる人になりぬれば、髪あげな

どさたして、髪あげさせ裳着す。帳の内よりも出さず、いつきかしづき養ふ程にこの兒のかたちの清らなることよになく、家のうちは闇き處なく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しきこともやみぬ。腹だたしき事も慰みけり。翁竹を取ること久しくなりぬ。いきほひ猛のものになりにけり。この子いと大きになりぬれば、名を三室戸齋部秋田を喚びてつけさす。秋田、「なよ竹のかぐや姫」とつけつ。この程三日うちあげ遊ぶ。萬づの遊をぞしける。

春の初めよりかぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたる様なり。或人の「月の顔見るは忌むこと」と制しけれども、ともすれば人まには月を見てはいみじく泣き給ふ。ふ

づきの望の月に出で居て、切に物思へるけしきなり。近く使はる〻人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじく思し歎く事あるべし。よく〳〵見奉らせ給へ。」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ、うましき世に。」といふ。かぐや姫、「月を見れば、世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。かぐや姫のある所に到りて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」といへば、「思ふこともなし、物なむ心細く覺ゆる。」といへば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物思すけしきはあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ではあらむ。」とて、なほ月出づれば出で居

つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月の程になりぬれば、なほ時々は打歎き泣きなどす。これをつかふものども、なほ物思すことあるべしとさゝやけど、親を始めて、何事とも知らず。

はづきの望ばかりの月に出で居て、かぐや姫いといたく泣き給ふ。人めも今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもゝ「何事ぞ。」と問ひさわぐ。かぐや姫泣く〳〵いふ、「さきぐも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて打出で侍りぬるぞ。己が身はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契なりけるによりてなむ、この世界にはまうで來たりける。今は歸るべきになりにければ、この月の望に、かのもとの國より迎に人

人まうで來んず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひていみじく泣くを、翁「こはなでふことを宣ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、わが丈立並ぶまで養ひ奉りたるわが子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。」といひて、「われこそ死なめ。」とて、泣きのゝしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。片時の間とて、かの國よりまうで來しかども、かくこの國には、數多の年を經ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず、こゝにはかく久しく遊び聞えてならひまつれば、いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず、罷りなむとする。」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人ども、年頃ならひて、立別れなむ

ことを、心ばへなどあでやかに、美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に悲しがりけり。

この事を帝聞し召して、竹取が家に御使遣はさせ給ふ。御使に竹取出であひて泣くこと限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈まり、目も爛れにけり。翁今年は五十ぢばかりなりけれども、御思には片時になむ老になりにけると見ゆ。御使仰言として翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、實にか。」と仰せ給ふ。竹取泣く〳〵申す、「この望になむ、月の都よりかぐや姫の迎にまうで來なる。たふとく問はせ給ふ。この望には、人々賜はりて月の都の人まうで來ば、捕へさせむ。」と申す。御使歸り參りて、翁の有樣申して、奏しつることぐも申すを聞し召して宣ふ、「一目見

六衛　左右の近衛衛門兵衛府

嫗　竹取の翁の妻

塗籠　土藏造りの藏

給ひし御心にだに忘れ給はぬに、旦暮見馴れたるかぐや姫を遣りては、いかゞ思ふべき。」とて、かの望の日司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人を差して、六衛のつかさ合はせて、二千人の人を竹取が家に遣はす。

家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓矢を帶して居り。母屋の內には、女どもを番にすゑて守らす。嫗塗籠の內にかぐや姫を抱かへて居り。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、「かばかり守る處に天の人にも負けむや。」といひて、屋の上に居る人々にいはく、「つゆも物空に翔らば、ふと射殺し給へ。」守る人々のいはく、「かばかりして守る處に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさむと思ひ侍り。」といふ。

翁これを聞きて、頼しがり居り。これを聞きて、かぐや姫は、「鎖し籠めて守り戦ふべきしたぐみをしたりとも、あの國の人をばえ戦はぬなり。弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、皆開きなむとす。あひ戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。」翁のいふやう、「御迎に來む人をば、長き爪して、眼をつかみつぶさむ。さが髪を取りてかなぐり落さむ。さが尻を掻きいでて、こゝらのおほやけ人に見せて、恥見せむ」と腹立ちをり。かぐや姫いはく、「聲高になのたまひそ。屋の上に居る人どもの聞くにいとまさなし。いまずかりつる志どもを思ひも知らで罷りなむずることの口惜しう侍りけり。長き契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが悲しく侍るなり。親たち

のかへりみをいさゝかだにつかう奉らで罷らむ道も安くもあるまじきに、月ごろも出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむことの、悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人は、いと清らにて老いもせずなむ。思ふこともなく侍るなり。さるところへまからんずるも、いみじくも侍らず、老い衰へたまへるさまを、見奉らざらむこそ戀しからめ。といひて泣く。翁「胸痛きことなしたまひそ。うるはしき姿したる使にも障らじ。」とねたみ居り。

かゝる程に宵打過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りて、降

り來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物に魘はるゝやうにて、あひ戰はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓矢を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、痿え屈まりたる中に、心さかしきもの、念じて射むとすれども、外ざまへ往きければ、何れも戰はで、心地たゞしれにしれてまもりあへり。立てる人どもは、裝束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王とおぼしき人、「家に造麿まうで來」といふに猛く思ひつる造麿も、物に醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、「汝をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて汝が助にとて片時のほどとて降しゝを、そこらの年頃、そこらの金賜ひて、身を換へたるが如くなりにたり。かぐや姫は、罪をつくり給へ

りければ、かく賤しきおのれが許に、しばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、能はぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに怪しくなり侍りぬ。又他處に、かぐや姫と申す人ぞおはしますらむ」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、「いざかぐや姫、穢き處に、いかで久しくおはせむ」といふ。立て籠めたる所の戸、卽ちたゞあきにあきぬ。格子どもゝ人はなくしてあきぬ。嫗抱きて居たるかぐや姫外に出でぬ。え留むまじければたゞさし仰ぎて泣居り。

竹取心惑ひて泣きふせる所に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも心

にもあらで、かく罷るに、昇らんをだに見送り給へ。といへども、何しに悲しきに見送り奉らむ。われをばいかにせよとて棄てゝは昇り給ふぞ。具して率ておはせね。と、泣きて伏せれば、御心惑ひぬ。

かぐや姫天に昇る

「文を書きて罷らむ。戀しからむをり〳〵取出でて見給へ。とて、打泣きて書くことばは、

「この國に生まれぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで、侍らで過ぎ別れぬること、かへすゞ〳〵本意なくこそおぼえ侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも墜ちぬべき心地す。」

と書置く。

天人の中に持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。一人の天人いふ、「壺なる御薬奉れ、穢き處のものきこしめしたれば、御心地悪からむものぞ。」とて、持てよりたれば、聊か嘗め給ひて少しかたみとて、脱ぎおく衣に包まむとすれば、或天人包ませず、御衣を取出して着せむとす。その時にかぐや姫「しばし待て。」といひて「衣着つる人は心ことになるなり。物一言いひ置くべき事あり。」といひて文書く。天人遅しと心もとながり給ふ。かぐや姫「物知らぬ事な宣ひそ。」とて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

「かく數多の人を賜ひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうで來て、

取率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕つかうまつらずなりぬるも、かく煩はしき身にて侍れば、心得ず思し召しつらめども、心強くうけ給はらずなりにしこと。なめげなるものに思し召しとゞめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる」。とて、

今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひいでぬる

とて、壺の薬添へて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人取りて傳ふ。中將取りつれば、ふと天の羽衣打着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと、おぼしつる事も失せぬ。この衣着つる人は、物思もなくなりにければ、車に乘りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁、嫗、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書置きし文を讀みて聞かせけれど、「何せむにか命も惜しからむ。誰が

頭中將　藏人頭兼近衞中將

爲にか、何事もやうもなし」。とて藥もくはず、やがて起きもあがらで病み臥せり。

中將人々を引具してかへり參りて、かぐや姫をえ戰ひ留めずなりぬることをこま〳〵と奏す。藥の壺に御文添へてまゐらす。ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、物も聞し召さず、御遊などもなかりけり。大臣・上達部を召して、「何れの山か天に近き」。と問はせたまふに、ある人奏す、「駿河國にあるなる山なむ、この都も近く天も近く侍る」。と奏す。これを聞かせ給ひて、

あふことも涙にうかぶわが身には死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉れる不死の藥の壺に、御文具して、御使に賜はす。勅使には月岩笠といふ人を召して駿河國にあなる山の頂に、もて行く

上達部　公卿　公は攝政關白大臣　卿は大中納言參議及び三位以上

べきよし仰せ給ふ。峯にてすべきやう教へさせ給ふ。御文不死の藥の壺ならべて、火をつけて燃すべきよし仰せ給ふ。その よし承りて、兵士ども數多具して山へ登りけるよりなむ、その山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へたちのぼるとぞいひ傳へたる。（竹取物語）

七　土佐日記鈔

紀貫之

出立ち

男もすといふ日記といふものを女もして見むとてするなり。それの年しはすの二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。その由いさゝか物に書きつく。

或人縣の四年・五年果てゝ、例の事ども皆しをへて、解由など取り

紀貫之

平安朝の歌人
古今集の撰者
天慶九年（一九〇六）卒
年六十五
それの年
朱雀天皇の承平四年（一九三四）

解由
在任中の經理會計に相違ないことの證明書

紀貫之と筆蹟

住む館　國守の館　土佐の國府は長岡郡にあつた

山の康教

、住む館より出でて、船に乘るべき處へわたる。かれこれ知る知らぬ送りす。年ごろよく具しつる人々なむ別れがたく思ひて、しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。

二十二日、和泉國まで平かにと願ひ立つ。藤原言實、船路なれど、うまのはなむけす。上・中・下醉ひすぎていとあやしく、潮海のほとりにてあざれあへり。

二十三日、八木康教といふ人あり。この人、國に必ずしもいひつかふものにもあらずなり。これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の常として今はとて見えずなるを、心あるものは恥ぢずなむ來ける。これは物によりてほむるにしもあらず。

二十四日、講師馬のはなむけしに出でませり。ありとある上・下、

九日
承平五年（一五九五）
正月九日
大湊
高知縣長岡郡に
あつた
那波
〃知縣安藝郡奈
半利
奈半利川の川口

童まで醉ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字に
ふみてぞ遊ぶ。

海の上

九日のつとめて、大湊より那波のとまりをおはむとて漕出でけ
り。これかれたがひに國のさかひのうちはとて、見送に來る人
あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なむ、御館より出で
給ひし日より、こゝかしこに追ひくる。この人々の深き志は、こ
の海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれてゆく。こ
れを見送らむとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕ぎゆく
まに〳〵、海のほとりに留れる人も遠くなりぬ、船の人も見えず
なりぬ。岸にも言ふことあるべし、舟にも思ふことあれど、かひ

宇多
高知縣香美郡岸
本村宇田

てけ
天氣

なし。かゝれば、此の歌どもをひとりごとにしてやみぬ。

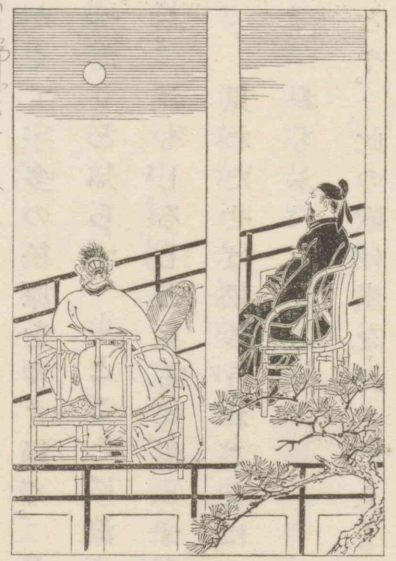
おもひやる心は海をわたれどもふみしなければ知らず
やあるらむ

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。其の松の數、いくそばく、幾千年
へたりと知らず。もとごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞとびか
ふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよめるうた。

見わたせば松のうれごとにすむつるは千代のどちとぞ
おもふべらなる

とや。此の歌は處を見るにえまさらず。
かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに〳〵、山も海も皆暮れ、夜ふけて
西東も見えずして、てけの事機取の心に任せつ。男も習はねば
いとも心細し。まして女は船ぞこに頭をつきあてゝ、音をのみ

ぞなく。かく思へば舟子・檝取は船歌うたひて、何とも思へらず。二十日、昨日のやうなれば船出さず。皆人憂へ歎く。苦しう心許なければ、只、日の經ぬる數をけふはいくか、二十日・三十日と數ふれば、およびも損はれぬべし。いとわびし。夜はいもねず。二十日の月出でにけり。山のはもなくて、海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見て、昔、阿倍仲麿といひける人は、唐土に渡りて歸り來ける時に、船に乘るべき處にて、かの國の人馬のはなむけし、別惜みて、かしこの漢



仲麿月を見る（芳年筆）

阿倍仲麿
靈龜二年（一三七五）唐に留學し後唐朝に仕へ寶龜二年（一四三一）彼の地に卒した年七十一

詩作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。それを見て、仲麿のぬし、我が國にはかゝる歌をなむ、神代より神もよみたび、今は上・中・下の人も、かやうに別惜み、喜もあり、悲しびもある時にはよむ」とて、よめりける歌。

あをうなばらふりさけ見れば春日なるみかさのやまに出でし月かも

とぞよめりける。かの國人、聞きしるまじうおぼえけれど、ことの心を、男文字に、さまを書きいだして、こゝの言葉傳へたる人に言知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思の外になむ愛でける。唐土とこの國とは言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そのか

男文字
漢字

みを思ひやりて、或人のよめる歌。

都にて山のはに見し月なれど波より出でて波にこそいれ

十六日
承平五年二月
山崎
今の京都府乙訓郡大山崎村
島坂
同郡向日町の西の長岡の上にある
桂川
大堰川の下流末は淀川に入る
飛鳥川
世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる（古今集）

都入り

十六日、今日の夕つ方、京へ上る序に見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、糰餅の法螺の形も變らざりけり。「賣る人の心をぞ知らぬ。」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて、人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸る時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川月の明きにぞわたる。人々のいはく、この川飛鳥川にあらねば、淵瀬さらに變らざりけり。」といひて、ある人のよめる歌。

久方の月におひたる桂川そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる。

天雲のはるかなりつるかつら川そでをひでても渡りぬるかな

又或人よめり。

かつら川わが心にも通はねどおなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて、處々も見えず。京に入り立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月明ければ、いとよく有樣見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も、荒れたるな

りけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預れるなり。さるは、便ごとに物も絶えず得させたり。今宵かゝる事と、聲高にものも言はせず、いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。さて池めいてくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もありき。五年・六年のうちに、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人も皆子抱きての、しる。かゝるうちに、猶悲しきに堪へずして、密かに心知れる人といへりける歌。

うまれしもかへらぬものを我が宿に小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。なほあかずやあらむ、またかくなむ。

見し人を松のちとせに見ましかば遠くかなしきわかれせましや

忘れがたく、くちをしきこと多かれど、えつくさず。とまれかうまれ、とくやりてむ。（土佐日記）

八　うたひもの

神樂

劍本

しろがねの　目貫の太刀を　下げ佩きて　ならの都を

ねるは誰が子ぞ　ねるは誰が子ぞ

神樂　宮中の御神樂のときにうたふ歌詞は平安朝に定めたもの

ふる
奈良縣大和國石上布留神社虎にのり古屋をこえて青淵にみづちとり來む劍太刀もが
（萬葉集）

催馬樂
古い民謠を平安朝になつて譜を定めて雅樂の中へ入れたもの

末　いそのかみ　ふるやをとこの　太刀もがな　組の緒垂で
て　宮路通はむ　宮路通はむ

蓋

本　蓋の　ねたさうれたさや　御園生に參り來て　木の根を
掘りはんで　おさまさ　角折れぬ　おさまさ　角折れぬ

末　ねたさうれたさや　御園生にまゐり來て　木の根を掘り
はんで　おさまさ　角折れぬ

催馬樂

飛鳥井

飛鳥井に　飛鳥井に　やどりはすべし　おけ　かげもよ
し　かげもよし　みもひも寒し　みまくさもよし

老鼠

西寺の　老鼠　若鼠　おんもつんづ　袈裟つんづ　袈裟
つんづ　法師に申さむ　師に申せ　法師に申さむ　師に
申せ

梁塵秘抄版本

今樣

法華

生死の大海ほとりなし　佛性眞如岸遠し

筆蹟
いけのすゞしきみぎはには・なつのかげこそなかりけれ、こだかきまつをふくかぜの、こゑもあきとぞきこえぬる

今樣
平安朝に新に出來た一種の俗謠多くは七五四句

慈鎭
天台座主
關白藤原忠通の子慈圓
愚管抄の著者
嘉祿元年(一八八四)寂
年七十一

朗詠
詩や賦の句を特別の節でうたふもの
平安朝に盛に行はれた

元稹
唐の詩人
白樂天の親友
太和五年(一四九一)歿
年五十三

辰星
水星のこと
水星は太陽と前後して出沒する星

源順
平安朝の和漢學者

妙法蓮華は船筏　來世の衆生渡すべし

子供

遊をせむとや生まれけむ　たはぶれせむとや生まれけむ
遊ぶ子供の聲聞けば　我が身さへこそゆるがるれ

慈鎭

四季

春の彌生の曙に　四方の山邊を見渡せば
花ざかりかも、白雲の　かゝらぬくまぞなかりける』

軒のあやめもかをるなり
花橘もにほふなり

夕暮さまのさみだれに　山時鳥なのるなり』
秋の初めになりぬれば　今年も半ばに過ぎにけり
わがよふけゆく月影の　かたぶく見るこそあはれなれ』
冬の夜寒の朝ぼらけ　契りし山路は雪ふかし

和漢抄の著者
後撰集の撰者
永觀元年(一六四三)卒
年七十三

三伏
從二夏至一後、第三庚爲二初伏一、第四庚爲二中伏一、立秋後初庚爲二後伏一。謂之三伏。
(初學記)

錯午
雜錯交迕也
(文選注)
迕午相通ず

玄冬
冬は色にては黑に當る故にいふ

寺田寅彦
物理學者
雅名は吉村冬彦
東京帝國大學教授
理學博士
明治十一年高知縣生

心のあとはつかねど　思ひやるこそあはれなれ』

元稹

朗詠

螢

螢火亂れ飛んで秋已に近し
辰星早く沒して夜初めて長し

源順

松

九夏三伏の暑き月には竹錯午の風を含み
玄冬素雪の寒き朝には松君子の德を彰す

九　科學者と藝術家

寺田寅彦

藝術家にして科學を理解し愛好する人も無いではない。又科學者で藝術を鑑賞し享樂する者も隨分ある。しかし藝術家の

中には科學に對して無頓着であるか、或は場合によつては一種の反感を抱くものさへある樣に見える。又多くの科學者の中には藝術に對して冷淡であるか、或は寧ろ嫌忌の念を抱いて居るかのやうに見える人もある。場合によつては藝術を愛する事が科學者としての墮落であり、又恥辱である樣に考へて居る人もあり、或は文藝といふ言葉から直ちに不道德を聯想する潔癖家さへ稀にはある樣に思はれる。

科學者の天地と藝術家の世界とはそれほど相容れぬものであらうか。これは自分の年來の疑問である。

夏目漱石先生が嘗て科學者と藝術家とは、其の職業と嗜好とを完全に一致させ得るといふ點に於て共通な者であるといふ意味の講演をされた事があると記憶して居る。勿論藝術家も時

として衣食の爲に働かなければならぬと同樣に、科學者も亦時としては同樣な目的の爲に自分の嗜好に反した仕事に骨を折らなければならぬ事がある。併し其の樣な場合にでも、其の仕事の中に自分の天與の嗜好に逢着して、何時の間にかそれが仕事であるといふ事を忘れ、無我の境に入り得る機會も少くない樣である。況や衣食に窮せず、仕事に追はれぬ藝術家と科學者が、それ〴〵の製作と研究とに沒頭して居る時の特殊な心的情態は、其の間に何等の區別をも見出し難い樣に思はれる。しかしそれだけのことならば、或は藝術家と科學者とのみに限らぬかも知れない。獵師が獲物を狙つて居る瞬間に經驗する機微な享樂も、樵夫が大木を倒す時に味はふ一種の本能滿足もこれと類似の點がないとはいはれない。

しかし科學者と藝術家の生命とする所は創作である。他人の藝術の模倣は自分の藝術でないと同樣に、他人の研究を繰返すのみでは科學者の研究ではない。勿論兩者の取扱ふ對象の內容には、それは比較にならぬ程の差別はあるが、其處は又可なり共有な點がないでもない。科學者の研究の目的物は自然現象であつて、其の中に何等かの未知の事實を發見し、未發の新見解を見出さうとするのである。藝術家の使命は多樣であらうが、其の中には廣い意味に於ける天然の事象に對する見方と其の表現の方法に於て、何等かの新しいものを求めようとするのは疑もない事である。又科學者が此の樣な新しい事實に逢着した場合に、其の事實の實用的價値には全然無頓着に、其の事實の奧底に徹底するまでこれを突き止めようとすると同樣に、少くとも純眞なる藝術が一つの新しい觀察創見に出逢つた場合には、其の實用的の價値などには顧慮する事なしに、其の深刻なる描寫表現を試みるであらう。古來多くの科學者が此の爲に迫害や愚弄の焦點となつたと同樣に、藝術家が其の爲に悲慘な境界に沈淪せぬまでも、世間の反感を買つた例は尠くあるまい。此の樣な科學者と藝術家が相逢うて肝膽相照らすべき機會があつたら、二人は恐らく會心の握手をかはすに躊躇しないであらう。二人の目差す所は同一な眞の半面である。

世間には科學者に一種の美的享樂がある事を知らぬ人が多いやうである。しかし科學者には科學者以外の味はふ事の出來ぬやうな美的生活があることは事實である。例へば古來の數學者が建設した幾多の數理的の系統は其の整合の美に於て恐

ニュートン Newton (1642—1727) 英國の有名な物理學者

ヴォルテーア Voltaire (1694—1778) 佛國の啓蒙哲學者文學者

フォーグト K.Vogt (1817—1895) 獨逸の科學者

らくあらゆる人間の製作物の中で最も壯麗なものであらう。物理化學の諸般の法則は勿論、生物現象中に發見される調和的普遍的の事實にも單に理性の滿足以外に吾人の美感を刺戟することは少くない。ニュートンが一見捕捉し難い樣な天體の運動も簡單な重力の法則によつて整然たる系統の下に一括されることを知つた時には、實際ヴォルテーアの謳つた樣に神の聲と共に渾沌は消え、闇の中に隱れた自然の奧底は其の帷帳を開かれて、玲瓏たる天界が眼前に現れた樣なものであつたらう。フォーグトは其の結晶物理學の冒頭に於て結晶の整調の美を管絃樂に譬へて居るが、又最近學者の研究によつて始めて明になつた結晶體分子構造の如きものに對しても、多くの人は一種の美に醉はされぬわけに行かぬことゝ思ふ。此の種の美感は

例へば壯麗な建築や崇重なる音樂から生ずるものと根本的に可なり似通つたところがある樣に思はれる。

又一方に於て、藝術家は科學者に必要なと同程度若しくはそれ以上の觀察力や分析的の頭腦をもつて居なければなるまいと思ふ。此の事は或は多くの藝術家自身には自覺して居ないことかも知れないが、事實はさうでなければなるまい。如何なる空想的・夢幻的の製作でも、其の基底は鋭利な觀察によつて複雜な事象を其の要素に分析する心の作用がなければなるまい。若しさうでなければ一木一草を描き、一事一物を記述すると云ふ事は不可能である。そして其の觀察と分析と其の結果の表現の仕方によつて其の作品の藝術としての價値が定まるのではあるまいか。

或人は科學を以て現實に卽したものと考へ、藝術の大部分は想像或は理想に關したものと考へるかも知れないが、此の區別は餘り明白なものではない。廣い意味に於ける假說なしには科學は成立し得ないと同樣に、嚴密な意味で現實を離れた想像は不可能であらう。科學者の組立てた科學的系統は畢竟するに人間の頭腦の中に築きあげ造り出した建築物・製作品であつて、現實其の物でないことは哲學者を俟たずとも明白な事である。又一方に於て、藝術家の製作物は如何に空想的のものでも、或意味に於て皆現實の表現であつて、天然の法則の記述でなければならぬ。俗に繪そら事といふ言葉があるが、立派な科學の中にも嚴密に詮索すれば繪そら事は數へ切れぬ程ある。科學の理論に用ひられる方便假說が現實と精密に一致しなくても差支

プランク
Max Planck
(1858—　)
獨逸の物理學者

へないならば、謂はゆる繪そら事も少しも虛僞ではない。分子の集團から成る物體を連續體と考へてこれに微分方程式を應用するのが不思議でなければ、色の斑點を羅列して物象を表はすことも少しも不都合ではない。

もう少し進んで科學は客觀的、藝術は主觀的のものであると云ふ人もあらう。しかしこれもさう簡單な言葉で區別の出來るわけではない。萬人に普遍であるといふ意味での概念は段々に吾人の五官と遠ざかつて來る。從つて普通人間の客觀とは次第に緣の遠いものになり、謂はゞ科學者といふ特殊な人間の主觀になつて來るやうな傾向がある。近代理論物理學の傾向がプランク等の言ふ如く次第に「人間本位の要素」の除去にあるとすれば、其の結果は一面に於て大いに客觀的であると同時に

立體派 Cubism
未來派 Futurism

又一面に於ては大いに主觀的なものとも謂へないことはない。藝術界に於ける立體派や未來派が直接五官の印象を離れた概念の表現を試みて居るのと可なり類した所がないでもない。次に自然科學に於ては其の對象とする事物の「價値」は問題とならぬが、其の研究の結果や方法の學術的價値には自ら他に標準がある。藝術の爲の藝術では其の取扱ふ物の價値より其の作物の藝術的價値が問題になる。さうして後者の價値といふことがむつかしい問題であると同樣に、前者の價値といふことも嚴密には定め難いものである。

科學の法則や事實の表現はこれを言表はす國語や方程式の形の如何を問はぬ。しかし藝術は事物そのものよりはこれを表現する方法にあるとも言はゞ言はれぬ事はあるまい。しかし

スケッチ Sketch

これもさう簡單ではない。成程科學の法則を日本語で譯しても英語で現しても、それは問題にならぬが、併し法則自身が自然現象の一種の言表はし方であつて事實そのものではない。唯言表はすべき事柄が比較的簡單である爲に、表はし方が多樣でないばかりで、必ずしも唯一ではない。藝術の表現しようとするは、寫してある事物自身ではなくて、それによつて表はさるべき「或物」であらう。唯其の或物を表はすべき手段が一樣でない、國語が一定しない。併し强ひて言へば一つの藝術品は或言葉で表した一つの事實の表現であるとも謂はれぬことはない。然らば植物學者の描いた草木の寫生圖や、地理學者の描いた風景のスケッチは藝術品と謂はれ得るかといふに、それは勿論違つたものである。何故とならば事實の表現は必ずしも藝術で

はない。繪を描く人の表はさうとする對象が違ふからである。科學者の描寫は草木山河に關した或事實の一部分であるが、藝術家の描かうとするものはもつと複雜な「或物」の一面であつて、草木山河はこれを表はす言葉である。併し其の作物は作家だけの主觀に存するものでなくて、ある程度までは他人にも普遍的に存する物でなければ、鑑賞の目的物としての謂はゆる藝術は成立せず、從つてこれの批評などといふことも無意味なものとなるに相違ない。此の「或物」を强ひて言語や文學で表はさうとしても無理なことであらうと思ふが、自分は唯密かに此の「或物」が科學者の所謂「事實」と稱し「法則」と稱するものと相去ることは遠からぬものであらうと信じて居る。（萬華鏡）

清少納言
平安朝の文學者
枕草子の著者
肥後守清原元輔の女
一條天皇の皇后藤原定子に仕ふ

炭櫃
圍爐裏
火桶
圓火鉢の類

一〇 枕草子鈔

清少納言

春は曙

春は曙。やう〳〵白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、烏のねどころへゆくとて、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはて、、風の音蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこして炭もて渡るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火

宮　一條天皇の皇后　藤原定子
關白道隆の女　叔父道長の女彰子（上東門院）が中宮となつてから失意　年二十五で早世

吳竹　淡竹　はちく
この君　玉徽之字子猷。嘗借二居空宅一便令レ栽レ竹。或問レ之。徽之指レ竹曰、何可二一日無二此君一邪。（世說）

も、白き灰がちになりぬるはわろし。

此の君

五月ばかりに、月もなくいと暗き夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、聲々していへば、「宮出でて見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でて、「清こは誰ぞ。おどろおどろしうきはやかなるは」といふに、ものもいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るゝは、吳竹の枝なりけり。「清おい。この君にこそ」といひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に往きて語らむ」とて、中將・新中將・六位どもなど

清少納言（谷口香嶠筆）

頭辨　辨官で藏人頭に任ぜられたもの職　皇后宮職　藤原行成
御前の竹　清涼殿の前の吳竹

この君と稱す　晉騎兵參軍王子猷栽而稱二此君一、唐太子賓客白樂天愛爲二吾友一。（朗詠集、菅原篤茂）

上　一條天皇

ありけるは往ぬ。頭辨はとまり給ひて、怪しくいぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとしつるを、「職にまゐりて、同じくは女房など呼び出でてを。」といひて來つるを、吳竹の名をいとくいはれて、往ぬるこそをかしけれ。たれが教を知りて、人のなべて知るべくもあらぬ事をば、いふぞ」などの給へば、「清竹の名とも知らぬものを、なまなめしとや思しつらむ」といへば、「頭辨まことぞ。え知らじ」などの給ふ。まめごとなどいひあはせて居給へるに、「殿上人この君と稱す」といふ詩を誦じて、また集り來れば、「頭辨殿上にていひ期しつる本意もなくては、など歸り給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」とのたまへば、「殿上人さる事には、何のいらへをかせむ。いとなかなかならむ。殿上にてもいひのゝしりつれば、上も聞し召して、興ぜさせ給ひつる」と語る。頭辨もろともに、かへすがへ

左衛門の陣　建春門の内

す同じことを誦じて、いとをかしがれば、人々出でて見る。とりどりに物どもいひかはして歸るとて、なほおなじ事をもろ聲に誦じて、左衛門の陣に入るまできこゆ。つとめて、いととく少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、この事を啓したれば、しもなるを召して、「宮さる事やありし」と問はせ給へば、「清知らず。何ともも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣の取りなしたるにや侍らむ」と申せば、「宮取りなすとても」とうちゑませ給へり。誰が事をも殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さいはるゝ人をよろこばせ給ふもをかし。

にくきもの

いそぐ事ある折に、長言するまらうど。あなづらはしき人ならば、「後に」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづか

加持　病氣災難等を攘ふ爲に佛力の加護を祈る咒法

えがち　心得がほ

ひろめき　廣めきか

狩衣　もとは狩獵の時の布衣　當時は絹で製し六位以上の常服

しき人、いとにくし。硯に髪の入りて磨られたる。又墨の中に、石こもりて、きしく〳〵ときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者求むるに、例ある處にはあらでほかにある、尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、喜びながら加持せさするに、この頃物のけに困じにけるにや、居るまゝにすなはち、ねぶり聲になりたる、いとにくし。なんでふことなき人の、すゞろにえがちに物いたういひたる。火桶・炭櫃などに、手の裏打返し、皺押延べなどしてあぶり居る者。いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに、足をさへもたげて、物言ふまゝにおしすりなどもすらめ。さやうの者は、人のもとに來て、居むとする處を、まづ扇して、塵拂ひすてて、居も定まらずひろめきて、狩衣の前、下樣にまくり入れても居

式部の大夫　五位の式部大丞
駿河の前司　前駿河守
あめき　わめき
伊豫簾　伊豫國浮穴郡から出る細い篠で編んだすだれ

るかし。かゝる事は、いひがひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の式部の大夫、駿河の前司などいひしがさせしなり。また酒飲みてあめき、口をさぐり、髯あるものはそれを撫でて、盃人に取らするほどのけしき、いみじくにくしと見ゆ。「また飲め」などいふなるべし。身ぶるひをし、頭振り、口脇をさへ引垂れて、童べの、國府殿に參りて」など謠ふやうにする。それはしも、まことによき人の、さし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物羨みし、身の上嘆き、人の上言ひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、言ひ知らせぬをば怨じ譏り、又わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かむとおもふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。伊豫簾など、懸けたるをうち

帽額の簾　上部に水引のある緣取の精製の簾
遣戸　横にあける引戸
たをめかし　撓まし
こほめく　ごと〳〵と音する
さいまくる　才がる

かづきて、さら〳〵と鳴らしたるもいとにくし。帽額の簾はましてこはき物の打置かるゝ、いとしるし。それもやをら引上げて出で入りするは、更に鳴らず。また、遣戸など荒く明くるも、いとにくし。少し擡ぐるやうにて明くるは鳴りやはする。悪しう明くれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顏のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に乘りてありく者、耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。わが乘りたるは、その車の主さへにくし。

物語などするに、差出でて、我一人さいまくる者。すべてさし出では、童も大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠の走り

あからさまに　かりそめに

誦文する　呪文を唱へること　クサメは卽ちその呪文の一

歩く、いとにくし。あからさまに來たる兒ども・童べをらうたがりて、をかしき物など取らするにならひて、常に來り居入りて、調度や打散らしぬるにくし。家にても、宮仕所にても、逢はでありなむと思ふ人の來たるに、空寐をしたるを我がもとにある者どもの、起し寄り來ては、寐ぎたなしと思ひ顏に引搖がしたる、いとにくし。今參りのさし越えて、物知顏に教へやうなることいひ、後見たる、いとにくし。はなひて誦文する人。おほかた家の男主（しゅう）ならでは、高くはなひたる者、いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたに躍り歩きて、もたぐるやうにするよ。また犬のもろ聲に、長々と鳴きあげたる、まが〳〵しくにくし。めのとの男こそあれ。女はされど、近くも寄らねばよし。をのこ兒をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、聊かもこの御事に違ふ者をば讒し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これが咎を心に任せて言ふ人もなければ所得、いみじきおもゝちして、事を行ひなどするよ。（枕草子）

本居宣長　江戸時代國學四大人の一人　伊勢松坂の人　享和元年（一八〇一）歿　年七十二

先なる物語　竹取物語　宇津保物語　落窪物語

後のもの　狹衣物語　濱松中納言物語　堤中納言物語

一一　源氏物語　本居宣長

こゝらの物語ぶみどもの中に、この物語はことに勝れてめでたきものにして、大方先にも後にも類なし。まづこれより先なる古物語どもは、何事もさしも深く心を入れて書けりとも見えず、たゞ一わたりにて、あるはめづらかに興ある事を旨とし、おどろおどろしきさまの事多くなどして、何れも〳〵ものゝあはれなるすぢなどは、さしも細やかに深くはあらず。又これより後のものどもは、狹衣などは、何事ももはらこの物語のさまをならひ

て、心を入れたりとは見ゆるものから、こよなく劣れり。その外もみなことなることなし。たゞこの物語ぞこよなくて、殊に深くよろづに心を入れて書けるものにして、すべての文詞のめでたきことは、さらにも言はず、世にふる人のたゝずまひ、春夏秋冬折々の空のけしき、木草の有様などまで、すべて書きざまめでたき中にも、男女、その人々のけはひ心ばせをおの〳〵ことゞに書きわけてほめたるさまなども、皆その人々のけはひ心ばへに從ひて一様ならず、よくわかれて現の人に逢見るごとく推量らるゝなど、おぼろげの筆のかけても及ぶべきさまにあらず。

さて又よろづよりもめでたきことは、まづ漢籍などはよに勝れたりといふも、世の人の事に觸れて思ふ心の有様を書けることはたゞ一わたりのみこそあれ、いと麁く淺きものなり。すべて

人の心といふものは、漢籍に書けるごと一方につきゞりなるものにはあらず。深く思ひしめる事に當りては、とやかくやとくだくだしく、めゝしく、亂れ合ひて定まりがたく様々の隈多かるものなるを、この物語にはさるくだ〳〵しきくま〳〵まで、殘る方なくいとも精しく細かに書きならはしたること、曇なき鏡にうつして向ひたらんがごとくにて、大方人の情のあるやうを書けるさまは、和漢古今行くさきにも比ふべき書はあらじとぞおぼゆる。

又すべて卷々の中に珍しく、おどろ〳〵しく、めさむるやうの事は、をさ〳〵なくて、始めより終まで、たゞ世の常のなだらかなる事の同じやうなる筋をのみ言ひて、いと長き書なれども、讀むにうるさくおぼゆることなく、倦むことはなくて、たゞ續きゆかし

くのみぞおぼゆるかし。

おのれ教子どもの爲に、早くよりこの物語を讀解きて聞かすること數多かへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、說くに倦む心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども、聊かも倦む心出で來ず、度ごとに始めて讀みたらむ心ちして、珍しくをかしくのみおぼゆるにも、いみじくすぐれたることは知られて、かへすがへすめでたくなむ。

（本居宣長全集　源氏物語玉の小櫛）

親鸞
淨土眞宗の開祖
弘長二年（一二六二）寂
年九十
西田幾多郎
哲學者

三　愚禿親鸞

西田幾多郎

余は眞宗の家に生まれ、余の母は眞宗の信者であるに拘らず、余自身は眞宗の信者でもなければ、また眞宗に就いて多く知るも

文學博士
京都帝國大學名譽教授
明治元年金澤市生

コペルニクス
Copernicus（1473–1543）現在の天文學の開祖
プロシヤ人

トレミ
Ptolemy
西紀二世紀の前半ごろのアレキサンドリヤの人
文學者
地理學者
數學者

のでもない。たゞ上人が在世の時、自ら愚禿と稱し、此の二字に重きを置かれたといふ話から、余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く上人の人となりを表はすと共に、眞宗の教義を標榜し、兼ねて宗教その者の本質を示すものではないかと思ふ。

人間には智者もあり、愚者もあり、德者もあり、不德者もある。併しいかに大なりとも、人間の智は人間の智であり、人間の德は人間の德である。三角形の邊はいかに長くとも、總べての角の和が二直角に等しいといふには何の變りもなからう。たゞ翻身一回、此の智、此の德を捨てた所に、新な智を得、新な德を具へ、新な生命に入る事ができるのである。是が宗教の神髓である。宗教のことは世の所謂學問・知識と何等交渉もない。コペルニクスの地動說が眞理であらうが、トレミの天動說が眞理であらう

融禪師　法融　四祖大師に攝せられて牛頭山法といふ一派を開く

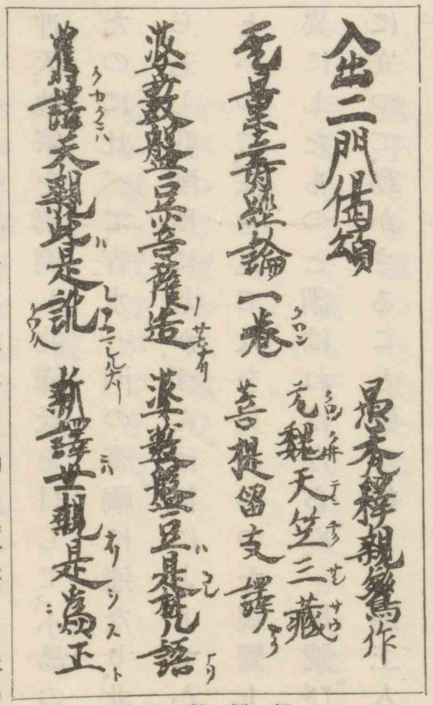
牛頭山　中華民國江南の潤州にある禪寺

四祖大師　道信　中華民國の禪宗第四世の祖

が、さういふ事はどちらでもよい。徳行の點から見ても、宗教は自ら徳行を伴なひ來るものであらうが、また必ずしも此の兩者を同一視することは出來ぬ。昔、融禪師が牛頭山の北巖に棲んで居た時には色々の鳥が花を啣んで供養したが、四祖大師に參じてから鳥が花を啣んで來なくなつたといふ話を聞いたことがある。宗教の智は智そのものを知り、宗教の徳は徳そのものを用ひるのである。三角形の幾何學的性質を究めるには、紙上の一小三角形で澤山であるやうに、心靈上の事實に對しては、英雄豪傑も匹夫匹婦と同一である。たゞ眼は眼を見ることは出來ず、山にある者は、山の全體を知ることは出來ぬ。此の智、此の徳の間に頭出頭沒する者は、此の智、此の徳を知ることは出來ぬ。何人であつても、赤裸々たる自己の本體に立返り、一たび懸崖に

筆蹟　入出二門偈頌　愚禿釋親鸞作　无量壽經論一卷　元魏天竺三藏菩提留支譯。　婆藪盤豆菩薩造。婆藪盤豆是梵語。舊譯天親此是訛。新譯世親是爲正。

手を撤して絶後に蘇つたものでなければ、之を知ることは出來ぬ。即ち深く愚禿たる所以を味はひ得たものゝみ之を知り得るのである。上人の愚禿はかくの如き意味の愚禿ではなからうか。他力といはず、自力といはず、一切の宗教は此の愚禿の二字を味はふに外ならぬのである。



親鸞筆蹟

かくいへば、愚禿の二字は獨り眞宗に限つた譯でもない樣であるが、眞宗は特に此の方面に着目した宗教である、愚人・惡人を正因とした宗教である、絶對的愛・絶對的他力の宗教である。いか

なる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀は唯汝の爲に我は粉骨碎身せりといつて、之を迎へられるのが眞宗の本旨である。

終りに宗祖其の人格に就いて見ても、彼の日蓮上人が意氣冲天、他宗を罵倒し、北條氏を目して「小島の主等が云々」と壯語したのに比べて、吉水一門の奇禍に連なり、北國の隅に流されながら「若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん。」といつて、法を見て人を見なかつた親鸞上人の人格は、頗る趣を異にしたものと謂はねばならぬ。風號び雲走り、怒濤澎湃の間に立つて、動かざること巖の如き日蓮上人の意氣も壯なことは壯ではあるが、煙波縹渺、風靜かに波動かざる親鸞上人の胸懷は、また何となく奥床しいではないか。（思索と體驗）

吉水一門　東山の吉水で淨土宗を說いた源空卽ち法然上人の門弟たち

北國の隅に　親鸞は承元元年（一二〇七）越後に流され五年目に漸く赦された

相馬御風　文學者　名は昌治　明治十六年新潟縣糸魚川生

一三　大人と子供

相馬御風

あづさゆみ春さり來れば
飯乞ふと里にいゆけば、
里子ども道のちまたに
手まりつく、我もまじりぬ、そが中に。
ひ、ふ、み、よ、い、む、な
汝がつけばあは歌ひ、
あが歌へば汝がつきて、
つきて、歌ひて、霞立つ
ながき春日をくらしつるかも。

これは私の最も好きな良寛和尙の歌の一つである。良寛は到る處で子どもたちと仲よしになつた。そして到る處で彼等と

共に遊んだ。子どもたちはまた到る處で良寛を歡び迎へた。そして到る處で彼と共に遊んだ。良寛ほど子どもと打ちとけ合つて遊び得た人は稀であらう。

子どもと共に遊ぶ――これくらゐ大人にとつてむづかしいことはなからう。單に子どもを遊ばせてやるだけではない。又單に子どもを相手に遊ぶだけでもない　子どもと共に遊ぶのである。互に一つに融け合つて遊び合ふのである。これは大變なことである。

どうかして子どもを喜ばせてやらう――かうした思はくやはからひがあつては、却て子どもは遊ばない。どうかして子どもと遊びたいものだ、どうしたらよからう――そんな思案があつても子どもは却て遊んでくれない。不思議に、子どもはこちら

のぼんやりしてゐる時に、何等の成心もない時に、却て打解けて遊びかゝつてくるものだ。子どものやうな純一無礙な心境を以てでなければ、子どもと共に遊ぶことが出來ない。子どもと共に遊び得る心は、萬物と共に遊び得る心だ。

しかし、本當に子どもと共に遊び得る人は少い。

教育は相互生成でなければならぬ。教師が生徒を教へるだけが教育ではない。親が子を教へるだけが教育ではない。大人が子どもを教へるだけが教育ではない。教師も生徒から、親も子から、大人も子どもから、教育されなければならぬ、そして相互に伸びてゆく――それが本當の教育であると思ふ。

童心の尊さが近來盛に說かれるやうになつて來た。喜ばしい

現象である。しかし、それは兒童の教育に於て童心を尊重するといふだけであつてはならない。同時にそれは教師なり、親なり、又一般の大人なりが、童心の感化をひねくれずに受容れることでなければならぬ。

兒童を教育すると同時に、自己も亦兒童からの教育を十分に受容れて、共に〳〵伸びゆく教師こそ、本當に私たちの要求する教師である。

四歳になる私の女の子をつれて海濱に遊んでゐた時、偶然彼の女の小さな口から、かういふうれしい言葉を聞かされた。

「とうちやん、此の石もらつていきませう」。

彼の女は海濱の小石原から自分の氣に入つた美しい色の小石を三つ四つ拾ひ上げてかういつたのであつた。

海濱から石を貰つて行く——それは拾つて行くのでも、採つて行くのでもない——何といふ美しい心情の現れであらう。野から花を貰つて行く、樹から果實を貰つてたべる。「その心！その心！」私はさう獨で心に叫ばずにはゐられなかつた。「尊いわが子の心よ。父さんはおまへのさういふ心をおまへが現在持つてゐる程の眞實さで、これまで一度だつて持ち得たであらうか。」私はそんな風にも自らを省みないではゐられなかつた。

家のまはりに草花の種を蒔く。芽が出るとそれを培ひ育てる。そして美しい花を咲かせて歡び眺める。

つぎ〳〵に人が來てはその花を眺め樂しんでくれる。それが

またむやみと嬉しい。見て樂しんでくれる人が多ければ、多いほど更に嬉しい。芽は育てれば育てるほど、育てる者にとりての歡びも增す。花の美は享樂してくれる人が多ければ多いほど、培ひ育てた人にとりて豐かさを增すやうに感じられる。

土は耕してくださいと人間に賴みはしない、稻も麥も人間に育てゝくださいと賴みはしない。耕し培ふのはむしろ人間の方からさせて貰つてゐるのである。人間がうける自然の恩惠は與へられたるそれではない。自然は强ひなどはしない。凡ては人間が貰はせていたゞいてゐるのである。本當に謙虛な心をもつ者のみが眞實に自然の惠にあづかることが出來る。さうしたひねくれずに自然の恩惠をいたゞく心がほしい。

エマーソン
Emerson
(1803—1882)
米國の評論家
詩人

松村武雄
神話學者
浦和高等學校教授
文學博士
明治十七年熊本縣熊本市生

自然に對し、世間に對し、また他人に對し、私たちはあまりに忖度が多すぎる。人が何かおいしいものでも與へようとすると、いやにこましやくれたり、ひねくれたり、樣子ぶつたりして、無邪氣にそれを受けない子どもが少くない。私たちにも丁度それに似たところが多分にある。

「太陽は大人にはその眼のみ照らすけれども、兒童にはその魂を照らす。」とエマーソンは云つた。それだ！それだ！（野を歩む者）

一四　子供の文學

松村武雄

想像力を基礎として考へると、人間には、自ら色々な型がある。視覺型・聽覺型・筋覺型といふのが、これである。眼から入つて來

る事物が、耳から入つて來る事物よりも、その心像を形成し易い種類のものを視覺型といひ、これと反對に、耳から入つて來る事物が眼から入つて來る事物よりも、寧ろその心像を形成し易い種類のものを聽覺型といふ。　そして、筋覺によつて最もよく事物の心像を形成し易い種類のものを筋覺型といふ。　固よりかうした分類は、決して絶對的なものではなく、多くの人にあつては、これらをそれ〴〵の度に於て併有する混合型をなしてゐることは、現時の實驗的研究によつて明かにせられてゐるのであるが、しかし心像形成の樣態の最も顯著なものを標準にすると、自ら上のやうな分類も出來るのである。

大體、子供は大人に比してより强度に視覺型である。　彼等が想像により造り出す心像は、視覺的心像が最も多いのを常とする。

言葉を換へて言へば、子供たちの想像力が最も容易に、且最も屢、生み出す心像は、具象的心像である。　鹿とか熊とかいふものを考へる場合は、大人はよく「言語心像」を形づくりがちで、それが言葉として現れて來る傾向が强い。　之に反して、子供は、こんな場合に、殆ど全く言語心像を形づくらないで、鹿や熊の具體的な形體がすぐに心に現れる。　子供が屢、想像的伴侶を自分の身邊に持つてゐるのは、かういふ心理から來てゐる。　彼等は誰もゐないところに、實際に友達がゐるかのやうな氣になつて、これと語り戯れ遊ぶ。　これ子供の幻覺及び空想が、外部的實在、具體的な存在の形式をとつて、彼等の精神作用により空裡に投出せられるからで、視覺型としての子供に頗るありがちの現象である。

子供の想像力の特徴の一つは、實にこゝに存する。

スチヴンスン　Robert Louis Stevenson (1850－1894)　英國近世の文學者詩人

"Child's play"　兒童の遊戯

次に子供の想像力は、それが産み出す想像心像の鮮明强烈なことを一つの特徴としてゐる。大人も、具體的心像を作り上げる場合が決して少いわけではないが、しかし同じく具體的心像でも大人のと子供のとでは、心像の鮮明性や心像形成の容易さの度に於て、よほど違つてゐる。子供は幻覺性が强くて、すべてのものを具體化し生物化する。また對象の客觀的條件を超越して、おのが心に浮かぶ隨意の表象にそれを見立てる。英國の文豪ロバート、ルイズ、スチヴンスンは、その小品文「兒童の遊戯」に於て、

「話が爭鬪のことになると、子供は起ち上つて、劍として何物かを手に入れ、息が切れてしまふまで、一片の家具と烈しい勝負を試みなくてはならぬ。話が王様の恩赦狀を携へて馬を走らせる段になると、子供は椅子に跨つて――あわたゞしさに顏が眞赤になるまで烈しく體を動かさねばならぬ。もし物語が斷崖の上の出來事を含んでゐるなら、子供は自ら簞笥によぢ登つて、そこからどしりと敷物の上に墜ちざるを得ない。」

といひ、

「また子供たちは、今一箇の椅子を城砦として烈しくこれを攻立てゝゐるかと思ふと、やがてはこれを怪龍として、刀を持つて斬つてかゝる。と思ふと、忽ちそれは王子の臨席を迎へるための玉座に變化する」

といつてゐるのは、至言でなくてはならぬ。かくして子供たちは、その想像心像が非常に鮮明强烈であるがため、屢〻現實の世界と想像の世界との區別を混同して、有りもしないことを、さなが

ら有るものゝやうに語り且行動する。

第三に、子供の想像力は、大人のそれに比して、より大きな合理化要求性を持つてゐる。これはちよつと考へると、一の逆説であり矛盾であるかのやうに思はれるが、よく考へると、當然の事である。大人の想像力は、經驗といふ大きな制約の下に束縛せられてゐる。從つて大人は、空想の夢幻境に遊んでゐるときでさへ、これは假象である。それが現實の世界ではなくて假象の世界であるとすれば、その世界では、どんな突飛な、不合理なことが起つても、毫も差支はない。いな現實世界の窮屈な合理性に飽いてゐる大人には、せめて想像の世界に於てゞも、理窟を忘却しつくしたいのである。だからそんな場合には、不合理を許容して、自ら積極的にこれを樂しむ氣持になる。これに反して子供

たちにとつては、想像の世界は假象の世界ではなくて、現實の世界の連續である。だからそこにどんな不思議なことが起るとしても、その不思議さには、それを裏づける理由がなくてはならぬ。子供は、どんな奇怪なことでも、それが實際の世界に有り得る、起り得ると想像してゐる。大人のやうに、假想の世界だから、そんなことが有り得る、起り得るとは考へてゐない。

だからさういふことが存在し生起するには、子供自身が納得するだけの原因や理由がなくてはならぬ。その原因や理由が、大人の心理からすれば、成立しないものであつてもかまはない。たとへば樹木がものを言ふとする。大人はこれを單に假象として物語の中に誘導するだけである。だから之を合理化する必要は少しも認めてゐない。之に反して子供には、樹木がもの

を言ふといふことは、假想ではない、實際の事實である。そして、彼等は自分たちが抱いてゐる萬有人感的信仰で、これを合理化してゐる。萬物が人間と同じやうなものであると想像し「だから樹木だつてものを言ふのだ」とするのである。子供の想像力の合理化要求性といふのは、かういふ心的活動を意味するのである。

子供の想像力の特徴は、上述のやうなものであるから、子供たちはその文學に於て、頻に不思議なもの、驚異すべきものを要求する。そして我々は適當にこの要求を充足してやるべき責務を持つてゐる。子供は、想像力が強烈であるから、その文學にまで想像的要素を持込んで、いやが上にこれを煽るのは、兒童教育上宜しくないことであるといふ見解の如きは、低級な常識から來る愚論である。想像馳騁期にある子供たちの心靈が、その適當な糧としての想像的要素を適當に與へられるとき、いかにすくすくと成長するか、また之に反してかういふ心的階段にある子供が想像的要素を含む文學から全く絶緣せらるとき、いかに彼等が心的憂鬱に陷るであらうか。「熱してゐるときに鐵を打て」といふ英國の諺は、かういふ場合によく思ひあはすべき言葉である。

しかしそれと同時に、子供の文學に現るゝ不思議なもの、驚異すべきものは、どこまでも具體的なものでなくてはならぬ。大人にとつては、眼に見えぬもの、解釋のつかぬもの、空漠としてゐるものほど、神祕を感じさせ、驚異を感じさせる傾向を持つてゐるが、子供は、先に言つたやうに、想像力の上から云へば、視覺型が多

コレッヂ　英國の詩人　批評家　Coleridge (1772—1834)

古海客の歌　"The Rime of Ancient Mariner"

く、且想像上の事象を具體化し生物化する傾向が強い故、掴みどころのないやうな、漠然とした神祕の如きは、彼等の理解以上若しくは以外のものであり、從つて彼等に興味と愉悅とを與ふることが出來ぬ。更に又その不思議なもの、驚異すべきものは、具象的なものであると共に、さういふ事象の背後に、子供を納得させるだけの原因・理由が潛んでゐなくてはならぬ。これは子供の想像力の一特徵たる合理化要求への自然の順應である。もしこの順應が閑却せられ若しくは無視せられると、その文學は子供の文學として必ず失敗する。魔法使ひがどんな不思議なことをしても、子供たちは、おとなしく若しくは喜んでこれを受容れる。なぜなら彼等の考に從へば、魔法使ひはどんなことでも爲し得るものであるからである。しかしコレッヂの「古海客の歌」の如きは、到底子供の喜悅し得る文學ではない。この物語に現るゝ不思議なもの、驚異すべきものは、多くは原因や理由を超越した神祕性を帶びてゐるからである。言葉を換へて言へば、それは大人の想像力に訴へる文學で、子供に訴へる文學ではない。子供は、さういふ性質の不思議さを理解することが出來ぬ、從つて心的困惑に惱まされて、茫然たり悄然たるだけである。

（兒童教育新論）

ペスタロッチー　十九世紀最大の教育家　瑞西チューリッヒに生る　Johann Heinrich Pestalozzi

小西重直　教育學者　京都帝國大學文學教授　文學博士　明治八年山形縣生

一五　全人としてのペスタロッチー

小西重直

ペスタロッチーの行迹思想をつら〳〵考へて見るに、私の考へてゐる全人といふものは、實に此の人に於て見出されるやうに

感ずるのである。信仰は吾人に安定の生活を與へるが、また同時に創造の生活を與へる。その創造の生活は、一面には信仰の發展、他面には文化價値の創造の根源と見ることが出來るであらう。信仰は人間と絶對とを橋渡しするものであつて、その中には有限と無限との二要素がある。有限の要素が含まれてゐるから、それを高めて、信仰それ自身を精進しなければならぬことになる。さうして見れば、信仰の精進も無限であるが、それが進むにつれて吾人は安定を與へられるのである。此の安定が精神の秩序を保つ所以である。ペスタロッチーは「隱者の夕暮」に於て

隱者の夕暮 'Abendstunde eines Einsiedlers (1780 著格言的隨想錄)

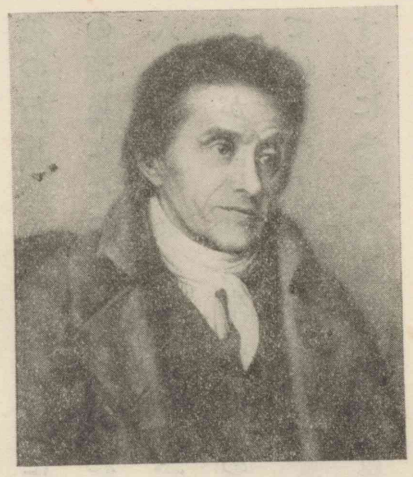
「神に對する信仰は、吾人の生活の靜平の源泉である。生活の靜平は內心の秩序の源泉である。內心の秩序は吾人の種々の力が亂れずに活用されてゐる源泉である。」

ブルドルフ Burgdorf 瑞西國ベルネ市の近くの町

といつてゐるが、これは單に彼の認識的の思想ではなく彼自身の生活、彼自身の行迹の上に表現せられてゐるやうに思はれる。彼の行迹、彼の思想の根柢には神に對する固き信仰があつて、その源泉となつてゐた。それにその當時の瑞西國の下層社會の人々の不幸なる有樣といふ實際の事實に觸れて、彼の思想、彼の行迹が養はれて來たのであらう。而も彼の努力せる目標としては、神への信仰の生活を一歩たりとも庶民に植ゑつけようとするにあつた。何となれば信仰のなきところには、人間の意識は靜平秩序を得ないからである。彼がブルグドルフの學校を廢せねばならなくなつて、親しき小兒たちに別れるに當り、その告別の辭に於て、子供たちに、

「ほんたうの神の子となつてくれ」。

といふことを力強く話してゐるのを見ても、此の事を知ることが出來る。



ペスタロッチー

アンナ Anna 一七六七年嫁し一八一五年十二月逝く年七十七

かくの如く、彼にとつては、人間の救濟と言ふことが、己の終生の願望であり、最後の目標であつたが、而もその根柢には、固き信仰を養はねばならぬといふ強い信念が横たはり、彼はまた常にこゝに意を用ひてゐたのであつた。或はまた「彼自身が固き信仰をもつてゐて、彼の生活は此の信仰の力によつて動かされてゐたのだ」といつてもよい。彼がその最愛の妻アンナの死する際に、彼女の小さい胸に十字架を押當てゝ、

「此の十字架のためにこそ我々は働いて來たのだ」。

といつたあの敬虔な態度。この態度こそ當時の彼の宗教的情操を如實に物語るものであつて、實にそれは涙ぐましいほどである。

かゝる信仰の生活からして、彼は一切の人間、特に不幸なる人々や、惡しく教育されてゐる人々に對して敬愛の態度を以て臨んだのである。かくの如き人々を彼は敬愛を以て取扱つて、決して粗末にせず、一歩たりとも眞の人間性に近づかしめたいと欲したのである。かういふ彼の教育態度こそ實に全人としての態度でなくて何であらうか。

彼は最初社會救濟の目的をもつて農業を始め、新しき農耕を試

み、また貧民を救濟しようと試み、或は貧民學校なども設けたが、何れも完成しなかつた。また彼がなした學校教育は、實に新しき試みであつて、永久の眞理を吾人に教へてはくれるが、しかし彼自身も之を自覺してゐたやうに、また吾人も之を認めざるを得ざるやうに、彼の仕事は決して完成されたものではなかつた。故に完成をもつて全人の意味とすれば、こゝに當て嵌らない。完成若しくは完全とは、出來上つたといふ意味であつて、私は此の意味を「全人」の意味から排除してゐる。ペスタロッチーにとつて、心の滿足は、荒海の中で泳いでゐることであつて、岸に泳ぎついて休むことは、彼には苦痛であつた。即ち彼は苦しみ惱みのうちに、寧ろ安息を感じたのであつた。換言すれば彼は創造の過程に價値を認め、創造の完成を考へてはゐなかつたと見る

一八一〇年の新年
"Neujahrsrede,,
新年講話

ことが出來る。このことは特に一八一〇年の新年に於て、彼が自分の學舍で話した一節を見ればわかる。即ち

「人間は岩の隙間から水の滴りを汲出す。これが人間の力である。その水は、岩角に衝きあたり、再び源に還つて流れぬといふこともあら〳〵。而もその水がだん〳〵岩をやぶり、石を流し、漸次に一つの大きい流となつてゆくといふこと、これが神の力である。」

といつてゐる。これを見ると彼は、水がその流を完成するのは神の力であると考へてゐるのである。これ、畢竟完成は神の世界に在つて、人間の世界にはない、人間は一歩々々と進む、或はペスタロッチーの語によれば、荒い浪の中に泳いでゐるといふことが全人の創造の生命といふものではなからうか。

彼は常に

「生活は陶冶する。」

といつてゐた。而して彼自身の生活、彼自身の事業に於て、此の語を實現せしむることを努めてゐたが、實に彼自身の生活は、永久に人間を陶冶する力をもつてゐると私は信ずる。即ち「彼は永久なる創造的生命を有つてゐるものである。」といふことが出來よう。（ペスタロッチー研究）

師範國文　第一部用　卷九　終

文部省檢定濟
昭和六年二月四日　師範學校國語科教科用

大正十四年十月廿七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十三日修正再版發行
昭和五年八月三十一日修正三版發行
昭和六年一月二十五日修正四版印刷
昭和六年一月二十八日修正四版發行

定價
卷一　金六十九錢
卷二　金六十七錢
卷三　金六十三錢
卷四、五、六、七、八　金六十一錢
卷九、十　金四十九錢

編者　吉田彌平　東京市神田區通神保町六番地
發行者　上原才一郎　東京市神田區通神保町六番地
發行所　光風館書店（電話神田三〇八七番）（振替口座東京三二七番）
印刷者　山崎與吉　東京市神田區通神保町六番地

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

學校藏書
山口縣師範學校
任之印
一部第卍号
科第卍号
廣兼惠

文庫
31
934
広島大学図書
2000301934